

はじめに

東日本大震災の被害を受けた福島の子どもたちを東京へ招待し、彼らに笑顔で過ごす夏休みの思い出をプレゼントする「おいでよ！東京 2013」プロジェクト。昨年に引き続き、皆様の温かいご支援と、ボランティアスタッフの方々の力を借りて、8月19日(月)に開催いたしました。

4つの施設から集まった子どもたちと職員は総勢78名。更に、今回の企画に賛同し集まって下さったボランティアスタッフは100名と、昨年よりも多くのご協力を得ることができました。

東日本大震災から2年以上が経ったものの、いまだ線量が高く、除染地区以外では遊べない子どもたちがいます。この「おいでよ！東京」プロジェクトは、福島県にある児童養護施設の方の「子どもたちを、屋外で思い切り遊ばせてあげたい」との思いから生まれた企画です。

昨年行った第1回目の「おいでよ！東京」と同じく、職業体験施設「キッズニア」で学びながら遊び、その後は屋外でプロのスポーツ選手たちと一緒に交流していただきました。

集合！

朝9時過ぎ、東京・豊洲にあるらぽーと豊洲の前に二台のバスが到着しました。二つの施設の子どもたちが、ブルーのTシャツを着て続々と降りてきます。残る二つの施設の子どもたちは、新幹線で東京までやって来ました。

キッズニアに到着したものの、やや緊張した面持ちの子どもたち。「おはよう！」というスタッフの声にも戸惑いがちにあいさつを返しています。しかし、昨年も参加していたボランティアスタッフの姿を見つけると、「去年もいた人だよ」と満面の笑顔を見せ、再会を喜ぶ様子があちこちで見られました。

今年は、子ども一人に一人の大人が一日付きっきりになることになっています。大人とペアを組んで歩き始めると、言葉少ないながらも会話を始め、ボランティアスタッフは担当の子どもとしっかりと手を繋ぎ、「バスで眠れた？」「今日は何をしたいか決めてきた？」などと問いかけていました。

「実はこれは、子どもたちにとって何よりうれしいこと」と、施設職員の方。「施設では、どうしても一人の子どもに一人の大人が付きっきりになることはできません。自己主張が強い子、問題を起こす子が優先されがちで、大人しい子や内気な子は、なかなか大人に意志を伝えることができないのです。今回のように、丸一日、一人の大人が自分のために時間を費やしてくれるのは、子どもにとって素晴らしい思い出になります」とお話ししてくださいました。



子どもたちを乗せたバスが到着！



ボランティアスタッフがお出迎え

キッズニア ～憧れの職業にチャレンジ～

いよいよキッズニアへ入ります。キッズニアはメキシコで始まった、子どもたちの職業体験施設です。およそ 90 種類もの仕事やサービスを体験し、キッズニア内で使うことができるお金「キッズ」を稼ぐことができます。

昨年も参加した子どもたちは、「去年稼いだキッズを持って来た」と、自慢げにお財布の中を見せてくれました。初めて体験する子は、何をするか迷っている様子。

「私はね、去年、獣医さんで手術室の体験をしたの。だから今年は診察室の体験をするの」と、話してくれたのは、四年生の女の子。犬のロボットを診察する体験ができるブースに、白衣を着て入る姿は堂々としていました。

「枝打ちをして森を育てる体験をするって、昨日から決めていたんだ」と言っていたのは、三年生の男の子。キッズニアスタッフの話を真剣に聞き、黙々と作業に打ち込んでいました。

こんな風に「やりたいこと」をはっきり主張する子がいる一方で、ボランティアスタッフが「何をしたい？」と問いかけても、戸惑ってしまう子も。

「待つのはイヤ」という理由で、なかなかやりたいものが見つからない四年生の男の子。「このままだと、何も体験できなくなっちゃう！」と思ったボランティアスタッフの男性が「ソフトクリーム作りをやってみようか」と提案してみたところ、イキイキとチャレンジ。最後には、出版社のブースで漫画作りに挑戦して、笑顔で記念撮影をしていました。

ある一年生の男の子は職業体験には目もくれず、元気いっぱい施設内を走り回っていたのですが、やっと消防士に挑戦することに。ボランティアスタッフの女性が見守る中で、消防士の制服を着ると、先ほどまでのやんちゃぶりとは打って変わって、顔つきがキリッとします。消防車に乗り込み、施設内の火事現場では小さな体でホースを抱え消火活動がんばっていました。お仕事を終えて制服を脱ぐと、「楽しかった」と満面の笑みで、ボランティアスタッフに駆け寄って報告をしていました。

そんな中、ハプニングも発生！二年生の男の子がお財布をなくしてしまいました。せっかくの楽しい思い出になるはずが……と、ボランティアスタッフの女性も、施設職員の方も慌てて探します。しかしなかなか見つからないので、「がんばって、もう一度、キッズを稼ごう！」と、決意を新たに。ボランティアスタッフと二人で、さまざまな仕事やアルバイトを積極的にチャレンジ。はじめは落ち込んでいた顔も少し元気を取り戻した頃に、キッズニアのインフォメーションにお財布が届いていました。「良かった！！」と、元気を取り戻しました。さらに「お金って稼ぐのって大変。お財布って大事だね」と、二人で話し合ったそうです。

このキッズニアでの体験で、子どもたちはたくさんの新しい発見をしたようでした。



キッズニア内での子供たちの様子。
皆、思い思いの仕事にチャレンジしました！

屋外で思いっきり運動 ～プロアスリートと交流～

15 時半からは、豊洲公演で体を動かして思い切り遊ぶ時間。このために駆け付けて下さったのが、陸上の秋本真吾選手と、東京・中央区の荒汐部屋の力士五名。秋本選手は、福島県大熊町の出身です。また、荒汐部屋の福轟力さん、大波さん、剛士さんもまた、福島県出身。つい先日も福島でのチャリティイベントに参加してこられたそうです。

まずはプロハードル選手の秋本さんが、走り方のレクチャーをスタート。

「まずは走ってみようか」という秋本選手の声を皮切りに、思い思いに芝生の公園を走ります。遅い子、早い子、それぞれですが、みんな笑顔で楽しそう。「じゃあ、ちょっと見ていてね」と、好奇心いっぱいの子どもたちを前に秋本選手がその場でジャンプ。すると、子どもたちの頭の高さよりも上に飛びあがってしまいます。その様子を見て、子どもたちは「すごい！」「おおっ！」と感嘆の声を上げます。「みんなもやってみようか」という秋本選手の呼びかけの元、子どもたちも一斉にジャンプ。少しでも秋本選手に近づこうと、一生懸命になっています。スキップで足の運び方を習うなどのレクチャーを受けると、それから再び、走り込みます。

四歳の双子の兄弟は、さっきまでボランティアスタッフの男性の肩車に乗って甘えていたのですが、年長のお兄さん、お姉さんに負けぬように、全力で走っていきます。子供たちは口々に、「さっきより早いみたい」「体が軽くなったよ」と、レクチャーの効果を実感している様子。

子どもたちへの走り方教室を何度も経験している秋本選手。「子どもたちは、視覚で捕えたことを真っ先に吸収してくれます。すると、そこからは素直に聞いてくれるので、学ぶのも早いですね」と、子どもたちの成長に喜んでいる様子。

続いて登場したのが、荒汐部屋の力士のみなさん。

「まずは、力士の取り組みを見て下さい」と言われて、力士同士の取り組みを実演。迫力ある試合に、子どもたちは大興奮。「じゃあ、みんなと対戦してみようか」と声がかかります。学年別に力士と試合。一人の力士と、五人の子どもで対戦しても、力士はなかなか土俵を割りません。それでも子どもたちは一歩も退かず、力士を土俵際に追い込むと、力を合わせて思い切り外へ押し出しました。どの学年も全勝を記録！応援する子どもたちも、土俵の中の子どもたちも大盛り上がり夏場所です。

そして最後は、大人 VS 子どもの綱引き大会。

子どもたち全員で、力士やボランティアスタッフと綱引きを戦います。しかし、なかなか力が敵わず、最初の試合は負けてしまいました。でも最後には、力士が子どものチームに参加して、子どもチームが勝ちました。

その後は、施設同士での交流会を実施しました。同じ県内にあっても、お互いの施設について知らないこともたくさんあります。「夏祭りはあるの？」「お休みは何をしているの？」と、お互いに質問をし合い交流を深めました。



どうやったらあんなに高く飛べるのかな？



みんなで力を合わせて、押し出した！

お別れのとき

いよいよ近づくお別れのとき。

「キッザニアでも色々なお仕事を体験して、将来の仕事のことも考えられたし、綱引きもかけっこもお相撲さんもおもしろかった」と、話してくれた子もいました。さっきまで大はしゃぎしていたけれど、その表情は引き締まって一回り大人になったように見えました。一日中、外で遊びまわって汗びっしょりになりながら、子どもたちの顔は晴れ晴れとしています。

協賛いただいた企業のみなさまからのお土産を受け取った子どもたちは、嬉しそうに「お菓子がいっぱい入っている！」「キティちゃんのグッズがある！」と、早速、中を確かめていました。

アイリス学園と青葉学園は、ここから再び電車に乗って東京駅へ。

「東京の都心で地下鉄に乗ることも、新幹線に乗ることも、子どもたちのこれからの人生にとって、とても良い経験だと思います」と、施設職員の方にも喜んでいただきました。有楽町駅から東京駅までは徒歩でビル街を歩きます。その町並みもまた、子どもたちにとっては新鮮なもので、ビルを見上げながら歩く子どもたちは興奮しているようでした。

いわき育英舎と白河学園の子どもたちは、豊洲公園近くからバスで施設へ。

ボランティアスタッフと一緒にバスの近くまで向かい、いざ乗り込む時になると、急にさびしそうに顔を曇らせる子どもたちも。「一日中、一緒に過ごしていると、わが子のような気持ちになってしまいますね」と、ボランティアスタッフの方も寂しそう。ある三年生の男の子は、一日一緒に過ごしたボランティアスタッフの女性といつまでも手を握って放しません。ボランティアスタッフが両手を広げると、抱きついて泣き出してしまいました。「また来年も、きっと会おうね」と、泣きながら小指を差し出し、ボランティアスタッフが指きりをします。ようやくバスに乗り込んでからも、窓から小指を差し出して「絶対だからね！」と、繰り返していました。ほかの子どもたちも、一生懸命バスの窓を開けて身を乗り出しそうになりながら、一日を一緒に過ごしたスタッフに手を振り続けていました。



お菓子を持ってきてくださった松栄堂の小野寺さん(左)



青空の下を駆け抜けて

施設の方々の声

◇白河学園

今年度もキッズニア招待、豊洲公園でのイベントと、大変お世話になりました。子どもたちもとても楽しく参加することができました。早速、「来年も行きたい！」や「中学生になってもキッズニアには行けるの？」等と、質問してくる児童もいました。キッズニアでの職業体験では、将来への希望や賃金をもらえる喜びを味わうことができました。豊洲公園でのイベントでは、なかなか会うことのできない一流選手や力士との交流など、楽しい時間を共有することができました。また一つ、子どもたちの良い思い出が増えたこと、大変嬉しく思います。

今後とも宜しくお願い致します。本当にありがとうございました。

◇青葉学園

今回のイベントを通じて、子どもたちのたくさんの笑顔が見られて良かったです。そしてまた、新幹線や地下鉄など初めての子どもが多く、大変勉強になりました。子ども一人一人にボランティアの方がついてくれて積極的に活動することができたことも、貴重な時間だったと思います。安全面でも助かりました。また、たくさんの方々と触れ合うことができたことが子どもたちにとって一番よかったと思います。東京に行くこと、新幹線に乗ることなど初めての子どもたちもいましたので、大変勉強になりました。子どもたちにとってもボランティアの方といっしょに過ごした時間はよい思い出になったと思います。子どもたちも「楽しかった～」「100キッズまで貯めるんだ」など、どの子もいい表情をしていました。子どもたちは大変有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。

◇いわき育英舎

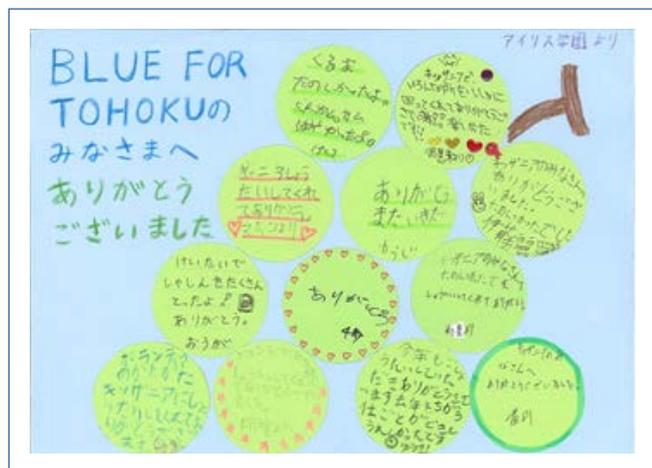
自分だけに1対1で関わってくれる大人がいることは、子どもたちにとって嬉しいことだったと思います。大人にぴったり付き添ってもらい、満たされた状態で職業体験ができたことは、児童にとってよい経験だったと思います。また、普段接する機会のないスポーツ選手と触れ合えて、子どもたちも喜んでいました。ありがとうございました。

◇アイリス学園

今回の「おいでよ！東京 2013」では、きめ細かいスケジュールを立てていただき、無事に参加させていただきました。子どもたち、一人一人にボランティアの方がついていただき、個別にじっくり関わっていただけたことは大変良かったです。特に、年少児については安心感がありました。また、新幹線・地下鉄の移動をさせていただいたことも良かったです。切符の買い方も、ボランティアの方と一緒に体験することができました。乗り物が好きな子どもは大喜びでした。今回のように、キッズニアで職業についての意識を早めに持つことも有意義なことだと思っております。スポーツ選手の身体能力に、子どもも私たち大人も大変驚きました。帰路にて疲れてしまう子どももおりましたが、人の多いキッズニアで遊んだ後、広い場所で体を動かさせたのは良かったと思います。



青葉学園から届いた感謝の寄せ書き



アイリス学園から届いた感謝の寄せ書き

おわりに

参加してくれた子どもたちは、全員無事に施設に帰ることができました。

「この日のために、日記以外の宿題は全部終わらせてきていたんですよ。日記には、このイベントのことを書くつもりなんですって」と、施設職員の方。子どもたちが、この日を心待ちにしていたことがうかがえて、私たちスタッフも嬉しくなりました。

また、今回は協賛いただいた皆様にも、現場にまで足を運んでいただきました。

いつも BLUE のシールプロジェクトにご協力いただいている岩手県一関菓匠「松栄堂」の社長室長、小野寺宏真様には、おいしいお菓子をご提供いただきました。「実際にこうして、子どもたちの笑顔を見ることができて良かったです」とおっしゃっていただきました。

子どもたちのお土産にお菓子をご提供いただいた湖池屋のマーケティング本部の小幡和哉さんにも参加していただいて、「こんなにたくさん的人数で行われているとは思ってもみなかったです。みんな楽しそうであたたかいイベントだと思います」とのご感想をいただきました。

いつもご支援をいただいている株式会社福田屋からは、昨年に引き続き豊洲公園でのイベント用のテントをお貸しいただきました。専務の福本和敏様自らテントを張っていただき、イベントを最後まで見守っていただきました。

また、ご協力いただきながらも当日都合により参加出来なかった多くの企業・寄附者にも感謝申し上げます。

たくさんの皆様のご協力のもと、「福島の子供養護施設の子どもたちに素敵な学びと遊びの一日を過ごしてもらおう」という当初の目的は達成できたと、自負しております。これも、皆様の温かいご支援があったからこそです。本当にありがとうございました。

今後とも、BLUE FOR TOHOKU をどうぞよろしくお願いいたします。

NPO 法人 BLUE FOR TOHOKU

公式サイト: <http://bluefortohoku.jp>

取材・編集)永井、池田、小芝、真鍋、他
写真)加藤、他



最後にみんなで記念撮影！